

主 題：信仰の成長を目指して9 : 寛容における成長
聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章5節

前回、私たちは4節「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」から学びました。なぜ、主はそのような命令をパウロを通してお与えになったのでしょうか？それは、私たち信仰者はいつも喜ぶことが出来るからであると見て来ました。ですから、私たち信仰者は、神のみことばを見る時に期待を持ちます。神がこのように命じておられるということは、私たちはそのようにできるということであり、神は私たちをそのように変えていってくださるという確信を持つからです。

パウロはここで「あなたはいつも喜ぶことができる」と言いました。そして、いつも喜んでいる人は神の栄光を現わしている人であり、さらに言うなら、主が喜んでおられる人です。このみことばが私たちに教えてくれたことは、いつも喜ぶためには「主にあって」ということがカギであるということです。つまり、主が喜びの源です。状況や環境が喜びをもたらすものではありません。それらは偽りの喜びです。いつもそれらは消えていってしまいます。主が与えてくださる喜びを持ってパウロは歩んでいましたし、多くの信仰者たちもそのように歩んでいました。ですから、彼らはどんな時でも、迫害の中でも悲しみの中にあつたとしても、同じように主の約束を信じ、信頼して、みこころに従い続けて行ったのです。そこに喜びの源があるからです。

多くの人たちは、私自身もそうでしたが、みこころに服従する生活は何とも堅苦しいと感じます。主のみこころに従って行くと言うと聞こえは良いかもしれませんが、それは自由を放棄することであって、そんな堅苦しい生活はご免！何か息苦しいと思うかもしれません。しかし、次のことを考えてください。みこころに逆らう生活はいったい私たちに何をもたらしたでしょう？あなたに何をもたらしているでしょう？確かに、一時的な満足はあるかもしれませんが、けれども、それが過ぎ去ると、何か満たされない不満の思い、不満足心がいつも私たちの内にありませんか？物があつたとしてもどうしても満足しきれない、まだ渇き切っている、渇きが満たされていないと…。将来に対する不安と恐れは自分の思い通りに生きていく生活によって解消されるものではありません。自分の好きなように生きていっても、そこには常に将来に対する不安と恐れがあり、絶望がつきまとうものです。そして、何よりも、神の警告に耳を傾けることをしないなら、その後には待っているのは永遠のさばきであり永遠の地獄です。つまり、自分の好きなように生きていく生活には何の祝福もないということです。そのことはもう私たち自身よく分かっています。信仰者である皆さんはそのことをよく分かっておられます。神のみこころに服従するまでは本当の自由も本当の喜びも得ることはない、私たちはよく知っています。

ですから、信仰の勇者たちを見るなら、彼らはみな主のみこころに従って行こうとしたのです。それは息苦しいとか堅苦しいものではなく、それこそが正しい生き方だからです。そして、私たちの最高の模範であるイエスを私たちが覚える時に、主イエス・キリストはまさにそのように生きておられました。父なる神のみこころに完全に服従された方が主イエス・キリストです。ヘブル人への手紙12:2にイエス・キリストの歩みに関して著者はこのように記しています。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」と。イエスの歩みを見て著者は非常に興味深いことを語っています。「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、」とイエスは十字架にまで従って行かれたということです。「ご自分の前に置かれた喜び」、つまり、父なる神のみこころに従順に従う時に喜びがあるということです。主イエス・キリストのその生き様を見て私たちが学ぶべきことは、イエスご自身もその喜びを頂きながら歩んで行かれたということです。イエスの生き様を見たときに私たちが教えられることは、主ご自身が持つておられた喜びは、主ご自身が父なる神のみこころに服従しておられたゆえに持つておられたものだということです。だから、主イエスがお考えになっていたことは、すべてをもって父なる神を喜ばせることでした。そのことを考えそのように歩んでいたのです。だから、私たちがこの主の歩みを見る時に教えられることは、私たちが父なる神を喜ばせることを選択していくなら、その時に、私たち自身に主の喜びが与えられ続けていくということです。

そのように考えると、非常にシンプルです。あなたが主のみこころに従っていくなら、従順に従っていくなら、そこには神からのすばらしい祝福、喜びがあるのです。でも、私たちがそこから外れてしまうなら、つまり、自分たちの考えに基づいて生きようとするなら、すぐにそれが間違っていることを神は私たちに示してくださるのです。どのようにして示されるのですか？喜びがなくなることによってで

す。だから、主イエス・キリストと同じように歩んだパウロは、どんな時でも、どのようなことが起ころうとも、喜びを失うことがなかったのです。なぜなら、彼は主と同じようにみこころに従い続けていったからです。主が喜ばれることを考え、それを選択して生きていったからです。そこに秘訣があるということを、私たちはもう一度しっかりと自分の心に刻むことです。

5節を見てください。今日はこの箇所を見ていきます。ピリピ4：5「**あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。**」、今日は「寛容」についてみことばを見ていきます。

A. 寛容

私たちは「喜び」において成長するだけでなく、「寛容」においても成長するようにという命令が与えられています。

1. 主の二つ目の命令

5節にある命令は「知らせなさい」とある通り「知らせる」ということです。

2. 何を知らせるのか？

いったい、何を知らせていくべきなのでしょう？簡単です。「あなたがたの寛容な心を、」とみことばにある通り「寛容な心を」知らせるのです。

1) その意味

「寛容」とは「寛大で、よく人を赦し受け入れること、とがめだてしないこと」と広辞苑は訳しています。

2) その聖書的意味

私たちが知りたいのは、パウロがどういう意味でこのことばを使ったのか？神の教える寛容さとはどういうものなのか？ということです。実は、この5節で使われている「寛容」ということば、日本語の聖書は「寛容な心」と訳していますが、これは一つの単語です。ここで使われている「寛容」ということばは新約聖書の中に5回しか出て来ません。実は、このことばは非常にたくさんの意味を含んだことばです。ですから、ひと言で「こうだ」ということは非常に難しいのです。それが証拠に、このピリピ人への手紙4：5以外の4箇所を見た時に、それらは次のように訳されています。

(1) I テモテ3：3＝「温和」、「酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、」

(2) テトス3：2＝「柔和」、「また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。」

(3) ヤコブ3：17＝「寛容」、「しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。」

(4) I ペテロ2：18＝「優しい」、「しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。」

ですから、先程も話したように、たくさんの意味を持ったことばが使われています。ただ「寛容」とひと言と言ってしまうと、ここで使われていることばの意味を的確に表わしているとは言えないのです。実際に、このことばをもう少し詳細に見ると、ギリシャ語の辞書ではこのような解説がされています。

「これは『判断に分別がある。道理をわきまえた判断をする。このことばは不正、恥辱や冷遇に対して憎しみや悪意を抱くことなく甘んじ、それらに関わらず、神に信頼することができる、謙遜で、忍耐、我慢強い不動さを意味する。』」と、「寛容」についてこのような定義が為されています。これを見ただけでもたくさんの意味があります。また、神学者のウィリアム・ヘンドリックソンはこのように訳しています。「このことばには『慎む、穏和、優しさ、親切、分別、思いやり、慈悲深さ、温厚、寛大、気前が良い、穏やかさ、譲歩する、自制』などの意味が含まれる。」と多くの意味に富んだことばです。

ですから、このことばにはこのような意味があるのですが、もう少し描いてください。親切であったり、優しさ、穏やかさ、思いやり、慈悲深さ、温厚、寛大さ、そして、人が過ちを犯した時にそれに対して寛大であること、同情の心を持つこと、他人の失敗にあわれみをかける、情けを持つ、他人の失敗に対してそれを赦そうとすると、このような意味がこのことばには含まれているということです。そのことばをパウロはここで使ったのです。

3. まとめ

ですから、訳者は単に「寛容」としていますが、このことばにはこのような意味があることを皆さん是非知って頂きたいと思います。その上で、パウロが命じたことは何だったのかを見ると、それは「このような寛大、寛容な心をすべての人に知らせるように」ということです。ということは、皆さん、「私は寛容です。」と私たち信仰者が言うようにと命じているのではありません。あなたの周りの人々

があなたを見て「この人は寛容な人だ」と認めるようになりなさいということです。ですから、あなたの寛容さを人々が認め、あなたが寛容な人であるとみなされるようにというのがここで言われている命令なのです。人がそのような評価を下すようにということです。これこそ私たちの責任です。証人である私たちクリスチャンの責任だと思いませんか？

私たちは人々の前で喜びを頂いたということを明らかにしますが、それだけでない、寛容さも明らかにしなさいと言うのです。つまり、私たちがすべての人に対して寛容を示すように、それがたとえ悪を為す人であったとしても、彼らに対しても寛容を示すようにということです。そのようにあなたが歩んで行くことによって、周りの人々が「確かにあの人は寛容な人である」とあなたのことを評するように、そのような責任があるというのがこの命令です。人が為す悪に関係なく、私たちは人々に対して親切であり、穏和であり、優しくあり、穏やかであり、情けを持って寛大さを持って接するように。どんな困難があろうと迫害を経験しようと、私たちは主から頂いた喜びを人々に示すことができると前回見て来ました。そして、人々が私たちに対して何を為そうと、私たちは主から頂いた寛容を人々に示すことができるのです。

ですから、主は私たちに対して「神があなたに与えてくださったすばらしい祝福を人々の前に明らかにしていきなさい」と言われるのです。私たちが人々の前で宣伝するのは自分ではありません。主を宣伝するのです。主は私たちに、世の中のいかなるものをもって也得ることのないすばらしい喜びをくださったのです。その喜びを人々の前で示すのです。主は私たちに寛容さを与えてくださったから、そのことを明らかにしなさいと言うのです。なぜ、そのことが大切なのでしょう？もし、私たちがそのように主から頂いた祝福を明らかにし、その祝福をくださった主を明らかにするのなら、まさに、それは主の栄光を現わす生き方だからです。私たちはこの主のすばらしさを世に証して行くのです。「私の神はこんなにすばらしいお方です！」と。もし、私たちがこの神がくださった祝福を人々の前で明らかにしないなら、何をもって証しますか？前回から見て来ているように、「神は喜びをくださる」と言いながら我々が喜んでいなかったらどうでしょう？「神は私たちを赦してくださる寛容な方です」と言いながら、我々が人を赦さなかったらどうですか？兄弟姉妹たちが本当にキリストにあって一つになっていなかったら、人々はどのような主を見るでしょう？

だから、イエスは言われたのです。マタイ 5：16「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と、まさに、このみことばの実践だと思いませんか？良い行ないをしたから救われるのではありません。私たちは良い行ないをする者として生まれ変わったのです。そして、そのように主の前に主がお喜びになることを実践することによって、人々は私たちのうちに働いている主を見てその主を崇めるようになるのです。それこそ、私たち信仰者の望み、願いではないですか？確かに、いつも喜んでいたり人々「あの人は寛容な人である」と人々から言われる人は、信仰において成長した人です。その点において完璧な人はいません。私たちはみな、そのような人に日々変えられることを望みながら、まだ、その途上にいます。昨日より今日、今日より明日、私たちはよりこういう人に変えられていきたいと、そのことを願いながら歩んでいるはずですよ。

なぜ、前回見た「喜び」にしても、今日見ている「寛容」にしても、それらにおいていつも喜び、人々が寛容な人だと評する、そのような人が霊的な人であると言えるのでしょうか？ なぜなら、

- (1) これらはどちらも御霊の実である：ガラテヤ 5：22「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、」と。生まれながらの性格がこうだと言っているわけではありません。イエスを信じ、イエスによって救われたなら、神はあなたをそのような人へと変えてくださるのです。その働きはもうすでに始まったのです。私たちに分かっていることは、神は私たちを主に似た者へと変えようとしているということです。
- (2) これは主の特徴でもあった：そして、私たちがイエスご自身を見る時に、彼はまさに寛容な人だったことが分かります。ローマ 2：4でパウロはそのことをこのように教えています。「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」。パウロはここで神が与えてくださった三つのことを述べています。「慈愛と忍耐と寛容」です。これらはすべて神が持つておられるものです。

「慈愛」＝罪人に対する深いあわれみ、何かをされたからお返しに愛するというのではなく先行的な愛です。相手に関係なくその人を愛するという愛です。

「忍耐」＝神はさばきを下して当然であるけれど、一人でも多くの罪人がこの救いに立ち帰って来るように、悔い改めるようにと、忍耐深く待つておられるその様子です。

「寛容」＝これは実はピリピ書で使われていることばとは違うのですが、人の過失をとがめだて

ず人を赦してあげることです。罪を見て見ぬ振りをするとか、罪に対して何もしないという意味ではありません。彼らが赦しを求めたらそれを喜んで赦してあげるので。

パウロがこのローマ2：4でこのようなことを言ったのは、これが神のご性質だからです。こういう神なのです。ですから、私たちが「イエスに似た者に変えられていく」と言うときは、間違いなく、このご性質においても私たちは主に似た者へと変えられていくのです。ですから、「寛容」とうのは、主ご自身がお持ちであったご性質であり、主は寛容において完全なお方であり、そして、その主に似た者へと私たちが変えられていくことによって、私たちの寛容さも成長していくのです。変えられていくのです。

B. 寛容であり続けていくためのカギ

先程見たように、難しい定義がたくさんありましたが、本当に人に対して優しくあるとか、親切である、思いやりがあるということを実践することは難しいです。赦すということも非常に難しいです。愛するなんてもっと難しいです。では、どうすれば私たちはここで命じられているように寛容さにおいて成長していけるのでしょうか？

1. 主がお喜びになる選択をすること

神のみことばを見ると、同じことが教えられています。旧約聖書のみことばを見ても同じことが言われています。「わたしに従え」と神は言われます。「わたしの言ったことを守れ」と言います。新約に入ってもそのメッセージは変わっていません。同じことを言われます。「わたしの命じることに従っていきなさい。わたしの言うことをやりなさい。」と言います。ですから、主がお喜びになることを為していこうとするとき、私たちが覚えなければいけないことは、人に対して、特に、人が私たちに悪を行なったときに、どのように応答するのかということです。一番難しいことです。人が皆さんに善を行なった時はその人に対して寛容であることは何も問題はありません。その人を愛することも問題ありません。「あの人は良い人だから、あの人は優しい人だから」と言います。

◎人の悪に対して正しく応答

でも問題は、人がもし皆さんに悪を行なった場合、皆さんのことを批判した場合、皆さんの悪口を言った場合、それらが罪であることは明らかですが、それは横に置いて、今考えたいことは、人があなたに悪を為した時に、あなたはそれにどのように応えるかということです。あなた自身が寛容さを失わないために、寛容さにあって成長するために必要なことは、あなたが正しい応答をすることです。それに係っているのです。「あの人がこんなことを言わなかったらいいのに…、聞いたから私の心は沈んでしまった。」と言うなら、それは何を意味していますか？あなたは正しい選択をしなかったということです。「沈む」選択をしたら沈むのです。でも、嫌なことを言われた、それは事実かもしれないとしてもその中にあってどのように応答すれば主がお喜びになるのだろうと考えて、正しいことを選択するなら、あなたは悪に動揺することがない信仰者へと変えられていくのです。

なぜ、そのように言えるのでしょうか？皆さん、神は人の悪に関しても良しとされているからです。だからが悪意をもってひどいことを言うなら、それはその人の選択です。でも、そのことを良しとされた神は、私たちにそれを聞く機会を与えてくださることも良しとされたのです。問題は、その時に私たちがどのような応答をするかです。もし、間違った応答をしたら私たちはそれに苦しめられていきます。見て来たように、喜びがなくなっていく、寛容さを失っていく。正しい選択をしなかったからです。でも、正しい選択は何かを考えて、祈りながらその正しい選択をして行く時に、私たちはその問題にあって成長するのです。

みことばはこのように教えています。パウロは1テサロニケ5：15でこのように言っています。

「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、」、人が為した悪に対してあなたが悪で応答しようとするなら、あなたも間違っていると言うのです。では、どうすればいいのでしょうか？「お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。」と、みことばはちゃんと教えてくれています。

「善を行っていきなさい、神がお喜びになることを選択しなさい。」と言います。実は、この件に関してペテロもこのように教えています。1ペテロ3：9「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」。ですから、パウロにしてもペテロにしても同じことを教えるのです。あなたは人の悪に対して悪で応じていないか？あなたは侮辱されたからとその人を侮辱しようとしていないかどうか？人が悪口を言ったらどこかでその人にやり返していないか？その人の悪口をどこかで口にしていないか？それは間違った応答なのです。だから、その結果、あなたから喜びがなくなります。あなたは寛容さにおいても成長しないのです。

結局は、私たちがどのように主の前を歩み続けるかということです。主の関心は、あなたが成長して

いくことです。あなたが主に似た者に変えられていくことです。聖霊なる神を与え、その働きは始まっているのです。聖書を与えてくださり、みこころを教えてください。問題は、私たちがいつもどのような選択をして行くかです。問題がない時の選択は簡単です。でも、私たちが問題に遭遇した時に試されるのです。試験のない学生生活はバラ色だともうかもしれません。でも、試験があつて私たちは大切なことを学ぶのでしょ。信仰の学校にあつても、私たちはいろんなテストを神から頂くのです。抜き打ちテストがあるのです。思いもかけない時にやつて来ます。「聞いていない」と言おうと試験はやつて来るのです。そして、その時に私たちは自分が知っていると思つていたこと、分かっていると思つていたことが実はそうでなかつたことに気付いたり、理解していると思つていたことが実は分かつていなかったと、いろんなことに気付かされていきます。そして、私たちはその試験を通して成長していくのです。

信仰者の皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、信仰の成長というのは私たちがイエスに似た者に変えられていくということです。主はイエスのように私たちを変えようとされているのです。だから、いつも喜ぶことができる人に私たちは変えられ続けていくのです。どんな時にも寛容さを現わす人に我々は変えられていくのです。それがイエスだったからです。だから、このようなことを守つて生きなさいと言うのです。

4節で、喜びは主からの祝福であるということを学びました。祝福であるゆえに、主の前を正しく、また、信頼をもって歩み続けていくように、神の祝福を頂くのであれば、神が命じられておられることを実践し、神が喜ばれることを行ない続けていきなさいとそう教えられました。もし、そのようにあなたが神との関係において正しければ、それは人々の間においても良き影響をもたらしていくと思いませんか？ 4節のみことばを見たときに「主にあって喜びなさい」とあります。私たちがいつも喜んでいることができるのは、神を信頼して主のみこころに従うからその祝福を頂くからです。そして、そのような祝福を頂いている私たちは、今度は、人々に対して寛容さを示していくのです。つまり、神との関係が正しいならそれは人間関係にも良い影響を及ぼすということです。人間関係にいろんな問題があるなら神との関係に問題がありませんか？ 考へてみてください。神との関係が正しくなければ、正しい人間関係を築くことはできないのです。そのようなときに私たちは寛容になれるか？ その時は一生懸命そう思ったつもりでも、心の中は大変苦しんでいます。そのような環境から逃げ出したいくなります。なぜなら、自分を偽っていることに気付くからです。でも、もしあなたが神の前に罪を悔い改めて、そして失敗をしながらでも主のみこころに従つていこうとして歩んでいるなら、そのことはあなたが主の喜びを持って生きるというその日々の歩みをもって証明されます。喜んでいるクリスチャンたちは神の前を正しく生きているからです。そして、喜んでいるクリスチャンたちは、人から命じられなくても寛容さを行動に出していきます。いつも神との関係を正しく保つこと、そうすると、そこからすばらしい祝福がいろいろな方面に出て行きます。これはすばらしいことです。

皆さん、よく話すように、私たち自身が信仰生活を難しくしていませんか？ 難しいことを要求されてもできないのが私たちですが、神の命令はとてもシンプルです。「わたしの言うことを行ないなさい」と言われます。しかも感謝なことに、神は私たちがそれを実践できないこともご存じですから、ちゃんと助けをくださるのです。ですから、私たちは神が備えてくださった助けをもらいながら、神のみこころに従つて行こうとするのです。何度も言うように、我々は神の前に何か証明しなければいけないのではないのです。私たちがいかに愚かだということは神がご存じです。「寛容であれ、寛容な心をすべての人に知らせなさい」とパウロは言いました。すべての人が「ああ、本当にこの人は寛容な人だ。」とあなたを見るようにあなたは歩んで行くことが必要だと言うのです。もちろん、このために神の助けが要ります。だから、私たちはこうして神のみことばを聞いた時に「神様、あなたがおっしゃるような寛容な人になっていきたい。赦された者として人を赦す者になりたい。あなたによって愛されている者として人々を愛する者になっていきたい。あなたが望んでおられるような人に私はなっていきたい。」と、その決心をして「主よ、どうぞ助けてください。私は到底自分の知恵や力でもって、そのような歩みをなすことができません。神様、助けてください。」と求めるのです。

どうぞ、皆さんの周りにいる信仰の友にこう言ってください。「私はこういう決心をした。このように生きていきたいと決心した。私がそのような歩みをしていなかったら、あなたは間違っているということを知りたい」と。そのことを教えてくれる信仰の友はすばらしい友です。

パウロはこの命令を与えた後、こんなヒント、助けを私たちに与えてくれます。

2. 主の再臨を覚えること

迫害の中にあつたピリピ教会のクリスチャンたちに対してこのように言います。5節の終わり「主は

近いのです。」と。私たちがいつも寛容であり続けるための一つ目のカギは「主がお喜びになることをいつも選択していくこと」でした。二つ目は「主の再臨を覚え続けていくこと」だとパウロは言います。この「主は近い」ということばですが、「近い」という副詞には二つの意味があります。「将来的な、時間的な意味」と「距離的な意味」です。どちらの意味も取れるのです。「将来的な、時間的な」とはキリストの再臨のことです。「距離的なこと」は神がいつも御側にいてくださる、私たちが神の御側にいるという神との距離のことです。

(1) 将来的な意味

どちらも取ることができのですが、この文脈を見るなら、パウロが言わんとしたこの「近い」とは「再臨」を指していると思います。なぜなら、ピリピ3：20を見るとこのように教えているからです。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。：21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」。これはキリストの再臨のことです。キリストの再臨の時に、私たちクリスチャンは死んだ者も生き残っている者もすべて主イエス・キリストの元に引き上げられて栄光のからだを頂く、この再臨のことをパウロは恐らく5節で教えたかったのしょう。その時に私たちは、イエスがヨハネ14章で弟子たちに教えられたみことばが成就することを確信します。14：1－3「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。：2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。：3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもてに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と、このことが成就します。キリストが帰って来られる時に、私たちはその備えられた場所へと迎えられますのです。

迫害下にあったクリスチャンたちは、確かに、この再臨を待望しながら、その迫害の中、主に従い続けて行きました。テサロニケのクリスチャンたちに対してパウロは再臨のメッセージを語っています。

I テサロニケ4：16－18「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、：17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会います。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」、私たちはイエスとともに過ごす、イエスの元に迎えられるということです。そして、「：18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」、イエスが帰って来られる日が近いのだから、確かに、苦しい迫害がある、明日いのちを落としてしまうかもしれない、でも、イエスが帰って来る日は近い、そのことをしっかり覚えて今日生きていこうと言うのです。ヤコブもこのように言っています。ヤコブ5：8「あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。」と。

ですから、パウロはここで「主は近い」という励ましをもって、迫害に遭っているこのピリピのクリスチャンたちに、「主の再臨が近い。だから、その時まで忠実であり続けて行きなさい。」とそのような励ましを与えたのだと思います。

(2) 距離的な意味

また、もし、これが距離的な意味でパウロが言ったにしても、同時に、それも信仰者たちにとって大きな励ましです。主がどんな時でもそばにいてくださる、迫害の中にあっても、主は決してあなたを離れることがないと言います。詩篇145：18「主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに【主】は近くあられる。」、主がいつもそばにいてくださると言います。詩篇119：151「しかし、【主】よ。あなたは私に近くおられます。あなたの仰せはことごとくまことです。」、主がともにいてくださると。もう一つ、詩篇31：20には「あなたは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。」と、神が守ってくださると言います。

信仰者の皆さん、何度も繰り返すようですが、私たちに与えられた祝福がどんなにすばらしいのか、私たち信仰者はもっと知らないといけません。私たちの弱さを知っておられる神はちゃんとこのような約束をくださったのです。隠れ場があるのです。逃げていくことができる場所があるのです。助けを求めることのできる、また、助けを与えてくださるお方がいるのです。それだけでも私たちにとても大きな励ましです。辛いこともあります。悲しいこともあります。でも、そのすべてを知って、その心を守ってくださる主がおられる。あなたをしっかりと支えてくださる主がおられる。一人ではないのです。全能の神があなたと一緒にいてくださるのです。それは信仰者にとって大きな慰めであり励ましでした。

そして、今の私たちにも同じことが言えます。こんな方がいつもともにいてくださるということは心

強いことです。私たちはこの方とこの地上の歩みをともにし、しかも、永遠にこの方と過ごせるのです。神は何という祝福をくださったのでしょうか？そして、この祝福の一つ一つを見た時に、我々は声を大してこのように言えます。「どの祝福を見ても、私たちが受けるにふさわしいものは何一つありません。受けるにふさわしいのはただ一つだけ、それは永遠のさばきです。」と。でも、主はそれに代えてこのような祝福をくださったのです。主は私たちが迎えに来てくださる。住まいを備えてくださり、そこに迎えてくださり、そして、あなたの信仰の歩みに関して主は正しい審判を与えてくださる、報いをくださると言います。しっかりしなさい、人の悪に対して悪に負けるのではなくて、主が喜ばれることを為していきなさい。寛容な心を持って、主がくださった寛容な心を持って歩み続けていきなさい、そのことを神は喜ばれるからというのです。

結論：

今日、私たちは「寛容」について学んで来ました。もう一度、主イエス・キリストの歩みを思い出し、教えてください。ペテロは主に関してこう言っています。Ⅰペテロ 2：23「**ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。**」と。主は悪を行わなかったのです。人の悪に対して悪で応じることはなかった、全部神に任せたのです。そして、正しいことをなさった。これが私たちの主の生き様でした。そして、ペテロはこの主の模範に倣って歩みました。もちろん、パウロもそうです。Ⅱコリント 10：1に「さて、私パウロは、キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。私は、あなたがたの間にいて、面と向かっているときはおとなしく、離れているあなたがたに対しては強気な者です。」とあります。「キリストの柔和と寛容をもって」と言います。パウロの歩みを見る時に、彼はイエスの寛容さを覚えながら生きていたということは間違いありません。

こうして彼らは主の前にどんな時にでも正しいこと、主がお喜びになることを選択しようとしていました。だから、彼らは主によって大いに用いられたし、彼らは主の栄光を現わしていったのです。彼らは人々の前で「この寛容さを与えてくださったのは私の主です。」とその主を証しました。そして、同じことを主は私たちに望んでおられるのです。寛容な主を信じてこの救いに与った信仰者の皆さん、このような歩みをあなたは為すことができるのです。今日、是非決心してください。「私はそのように生きていきたい。こんな人になりたい。だから主よ、どうぞ私を助けてください。」と。主の働きはあなたの内に継続していきます。そして、そのような決心をするあなたを主はしっかりと覚えて、そのような祝福をあなたに与えてくださるのです。

寛容さにあって成長していきなさいと見て来ました。そのように成長していこうではないですか。それは主の助けによってできるのですから。

《考えましょう》

1. 寛容な人とは、どのような人ですか？あなたのことばで記してください。
2. どうして、寛容な人であることを知らせることが大切なのでしょうか？
3. どうすれば、寛容な人になることができるのでしょうか？
4. あなたは今日のレッスンから何を教えられましたか？